

創世記29－30章「騙される中でも主の真実」

1A ラバンの騙し 29

1B ラケルとの出会い 1－14

1C 初めの出会い 1－8

2C 家への迎え 9－14

2B ラバンに使われるヤコブ 15－30

1C ラケルへの愛 15－20

2C 騙された後の七年 21－30

3B 姉レアへの主の憐れみ 31－35

3A 主の祝福 30

1B 息子たちの出産 1－24

1C ラケルの反発 1－8

2C 女奴隷による競争 9－13

3C 取り引き 14－21

4C ラケルへの願み 22－24

2B 家畜 25－43

1C 奴隷のような労働 25－30

2C 不利な報酬 31－36

3C 主による逆転 37－43

本文

創世記 29 章を開いてください。私たちは、ヤコブがお嫁さん探しの旅を始め、彼が野宿していたところに、天のはしごの夢を見たところまで見ました。そこで主が約束されたことは、次のことです。「28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」主が、共におられます。そして、どこにおいても守ってくださいます。そして、必ず、約束の地に帰らせてくださいます。アブラハム、イサクに与えた約束を、ヤコブにもかなえるのですが、それまでは、決して見捨てない、と言われています。これから、ヤコブの旅が労苦の伴った、とても長い期間のものになりますが、主は着実に、その約束をかなえられることを見ていきます。

1A ラバンの騙し 29

1B ラケルとの出会い 1－14

1C 初めの出会い 1－8

¹ヤコブは旅を続けて、東の人々の国へ行った。

約束の地、カナンの地にいる人々にとって、ユーフラテス上流地域のパダン・アラムは、方角としては北東になります。けれども、そこから、東のアッシリアやバビロンなど、メソポタミア地域への道になっているので、「東の人々の国」と呼んでいます。

² ふと彼が見ると、野に井戸があった。ちょうどその傍らに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。³ 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から転がして、羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻すことになっていた。

井戸が見えてきます。そこは人々が集まるところで、羊の群れに水を飲ますために羊飼いたちが集まっていました。異物が入らないように、石が置いていますが、それを動かすのは重いので、難儀です。それで、みなが集まってから一回だけ、開閉できるようにしています。

⁴ ヤコブがその人たちに「兄弟たちよ、あなたがたはどこの方ですか」と尋ねると、彼らは「私たちはハランの者です」と答えた。⁵ それでヤコブが「あなたがたはナホルの子ラバンをご存じですか」と尋ねると、彼らは「よく知っています」と答えた。⁶ ヤコブは彼らに尋ねた。「その人は元気ですか。」すると彼らは、「元気です。ほら、娘のラケルが羊を連れてやって来ます」と言った。

何か、聞き覚えのあるような出来事ですね。アブラハムのしもべが、イサクのお嫁さん探しの旅をして、井戸のところで祈っていたら、リベカがやって来た話です。

⁷ ヤコブは言った。「ご覧なさい。日はまだ高いし、群れを集める時間でもありません。羊に水を飲ませて、草を食べさせに戻ってはどうですか。」⁸ すると彼らは言った。「そうはできません。群れがみな集められて、井戸の口から石を転がすまでは。それから、羊に水を飲ませるのです。」

ヤコブのはやる心が伝わってきます。そして、彼の名前「かかとをつかむ」というように、彼は、機会があれば、すぐにそれをつかもうとします。アブラハムのしもべと比べてください、彼は祈っていました。ヤコブには、その祈りがありません。ヤコブは主を求めています、立ち止まって、主を待ち望むということがないです。

これが彼の人生の特徴になっています。主が彼を愛し、確かに見捨てず、約束をかなえていかれるのですが、彼自身が、自分の道の前に主を置くことをせず、それで自分で蒔いた種を刈り取っていくようなことが、どんどん起こっていきます。機会をつかむことは、悪くありません。いや、むしろ信仰によって動くことはとても大事です。しかし、立ち止まって、祈り願い、主の導きを仰いでいくということは、大事なのです。「詩 16:8 私はいつも【主】を前にしています。主が私の右におられるので私は揺るがされることがありません。」「箴 3:6 あなたの行く道すべてにおいて、主を知

れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」

ヤコブは、このことをしていなかったので、いろいろな労苦をしますが、ついに、神の御使いと格闘し、太ももの関節を外されて、それで主に抛り頼むことを学ぶ体験をします。

2C 家への迎え 9-14

⁹ ヤコブがまだ彼らと話しているとき、ラケルが父の羊の群れを連れてやって来た。彼女は羊を飼っていたのである。¹⁰ ヤコブは、母の兄ラバンの娘ラケルと、母の兄ラバンの羊の群れを見ると、すぐ近寄って行って、井戸の口の上の石を転がし、母の兄ラバンの羊の群れに水を飲ませた。

ここもとても似ていますね、アブラハムのしもべが祈り終える前に、リベカが来ました。同じように、彼が羊飼いたちと話しているうちに、ラケルがやってきました。違いは、しもべがリベカのすることを見つめていたのに対して、ヤコブは、すばやく動いていることです。

¹¹ そしてヤコブはラケルに口づけし、声をあげて泣いた。¹² ヤコブはラケルに、自分は彼女の父の甥であり、リベカの子であることを告げた。彼女は走って行って、父にそのことを告げた。

この口づけは、ロマンチックなものではなく、親愛を込めた挨拶のようなものです。リベカも、その男性が、親戚のアブラハムのしもべだと知り、走ってそのことを告げに行きましたが、同じように、ラケルも、リベカの子であると聞き、走って、父ラバンに告げに行きます。

¹³ ラバンは妹の子ヤコブのことを聞くとすぐ、彼を迎えに走って行って、彼を抱きしめて口づけした。そして彼を自分の家に連れて帰った。ヤコブはラバンに事の次第をすべて話した。¹⁴ ラバンは彼に「あなたは本当に私の骨肉だ」と言った。ヤコブは彼のところに一か月滞在した。

これは、真実に喜んだのだと思います。ラバンのところに、自分の妹の息子、甥が来たのですから、それは本当にうれしかったでしょう。ヤコブが、兄エサウに殺されるかもしれない、そして、怒りが収まるまでしばらく、ラバンのところにいなさいと母から言われたことなどを、伝えたはずです。それで、一カ月ぐらい滞在していました。

2B ラバンに使われるヤコブ 15-30

1C ラケルへの愛 15-20

¹⁵ ラバンはヤコブに言った。「あなたが私の親類だからといって、ただで私に仕えることもないだろう。どういう報酬が欲しいのか、言ってもらいたい。」

この言葉だけを聞けば、ラバンが何か寛大な人のように聞こえます。けれども、これは中東の地

域の人々に言い方であって、ヤコブは、暗黙のうちに働かされていたのだと思われます。いつの間にか働かされていて、それで報酬が欲しいのか言ってもらいたいと言っています。

¹⁶ ラバンには二人の娘がいた。姉の名はレア、妹の名はラケルであった。¹⁷ レアは目が弱々しかったが、ラケルは姿も美しく、顔だちも美しかった。

ここの、「目が弱々しかった」というのが、どういった姿なのか、ヘブル語だけでは定かではありません。疲れている、やつれているとも言えます。あるいは、ラケルが姿が美しく、顔だちも美しいとありますから、そういった、くっきりとした姿がなかったということでしょう。私たち夫婦が、エジプトを旅行した時に、女性たちが目の化粧に命をかけている姿を見ました。なぜなら、ムスリムで、すべてを覆っていて、目しか見えないからです。まさに、アラビアンナイトに出てくるような、妖美な目つき、目が大きく、彫の深い、エキゾチックな容姿だったのでは？と想像しています。それに対して、レアは、そういった、くっきりさがなかった、ということではないかと想像します。

¹⁸ ヤコブはラケルを愛していた。それで、「私はあなたの下の子ラケルのために、七年間あなたにお仕えます」と言った。¹⁹ ラバンは、「娘を他人にやるよりは、あなたにやるほうがよい。私のところにとどまっていなさい」と言った。²⁰ ヤコブはラケルのために七年間仕えた。ヤコブは彼女を愛していたので、それもほんの数日のように思われた。

ヤコブは、一目ぼれしていました。それで、結納金を支払う代わりに、七年間、無償で働くとお申し出たのです。これは、かなり大きい額です。七年間の給料ですから、普通よりも十倍は高い額だったのではないのでしょうか？けれども、彼にはそれは苦になりませんでした。「**ほんの数日のように思われた**」とありますね。

けれども、この、ラケルへの恋によって、いろいろ大変になります。まず、ラバンに、その弱みをつけ込まれます。そして、後にレアとラケルの間で、夫ヤコブの取り合いっこ、競争が起こります。ヤコブに必要なだったのは、ここでも祈りです。これは、特に若者には必要な知恵、教訓です。恋は、ここにあるように、人には普通、出てこない力が与えられます。けれども、主を第一にして、知恵を主からいただいて、いろいろな災いから守られる必要があります。

2C 騙された後の七年 21-30

²¹ ヤコブはラバンに言った。「私の妻を下さい。約束の日々が満ちたのですから。彼女のところに入りたいのです。」²² そこでラバンは、その土地の人たちをみな集めて祝宴を催した。²³ 夕方になって、ラバンは娘のレアをヤコブのところ連れて行ったので、ヤコブは彼女のところに入った。

まさに、自分がエサウをだましたように、見事にラバンにだまされました。ヤコブは、イサクに対し

てエサウであると偽りましたが、ここでは、ラバンがヤコブに対して、ラケルとして姉レアを連れてきたのです。

²⁴ ラバンはまた、娘のレアに、自分の女奴隷ジルパを彼女の女奴隷として与えた。

これは、アブラハムの時からあった習慣です。サラにハガルがいたように、ラバンは、レアに女奴隷ジルパを与えています。

²⁵ 朝になって、見ると、それはレアであった。それで彼はラバンに言った。「あなたは私に何ということをしたのですか。私はラケルのために、あなたに仕えたのではありませんか。なぜ、私をだましたのですか。」

なぜ、朝になるまで気づかなかったのか？婚礼の時は、顔に覆いがかかっています。そして、夜を共にしている時は、暗いので見えません。朝になって、日差しが入り、ようやくレアであることに気づいたのです。

²⁶ ラバンは答えた。「われわれのところでは、上の娘より先に下の娘を嫁がせるようなことはしないのだ。²⁷ この婚礼の一週間を終えなさい。そうすれば、あの娘もあなたにあげよう。その代わり、あなたはもう七年間、私に仕えなければならない。」²⁸ そこで、ヤコブはそうようにした。すなわち、その婚礼の一週間を終えた。それでラバンは、その娘ラケルを彼に妻として与えた。

これがラバンの思惑です。ヤコブが、働き者であることを見てとって、使うだけ使おうと考えたのです。ラケルをヤコブが愛しているのを見て、レアの分も含めて、働く期間を倍增できると企んだのでしょう。

²⁹ ラバンは娘のラケルに、自分の女奴隷ビルハを彼女の女奴隷として与えた。³⁰ ヤコブはこうして、ラケルのところにも入った。ヤコブは、レアよりもラケルを愛していた。それで、もう七年間ラバンに仕えた。

ラケルにもラバンは女奴隷ビルハを与えました。あまりにもひどい仕打ちなのですが、ヤコブはラケルを愛していたので、さらに七年間、仕える力が与えられました。しかし、問題は、余計なもの、レアがひっついて来たのです。だから、レアには冷たくあしらひ、ラケルを偏愛していました。

これが、これからの問題を引き起こします。姉妹の間での嫉妬、競争が始まります。しかし、主はその嫉妬を通して、なんと、ヤコブに、大きな家族を与える備えをされるのです。

3B 姉レアへの主の憐れみ 31-35

³¹ 主はレアが嫌われているのを見て、彼女の胎を開かれたが、ラケルは不妊の女であった。

主は、レアを憐れまれました。ヤコブが愛を注いでいないのを見て、ご自身が彼女に恵みを施されました。それに対して、ラケルは不妊です。サラも不妊でしたし、ラケルも長いこと、子が与えられませんでした。主は、不妊を用いられ、事を行われることが多いです。

ロマ 9 章には、神の選びについて、その主権について、パウロが、「ロマ 9:16 ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」と言ったとおりです。私たちが何をしたか、ではなく、主がもっぱら、事を成してくださいます。

³² レアは身ごもって男の子を産み、その子をルベンと名づけた。彼女が、「主は私の悩みをご覧になった。今こそ夫は私を愛するでしょう」と言ったからである。

ルベンは、「子を見よ」という意味です。悲痛ですね、痛々しいです。子が与えられたから、夫が自分を愛してくれるだろうと祈っています。

³³ 彼女は再び身ごもって男の子を産み、「主は私が嫌われているのを聞いて、この子も私に授けてくださった」と言って、その子をシメオンと名づけた。

シメオンは、「聞く」のシェマから、名づけられたものです。

³⁴ 彼女はまた身ごもって男の子を産み、「今度こそ、夫は私に結びつくでしょう。私が彼に三人の子を産んだのだから」と言った。それゆえ、その子の名はレビと呼ばれた。

レビは、「結ぶ(ラバ)」から来ています。夫と結ばれるだろうという期待です。

³⁵ 彼女はさらに身ごもって男の子を産み、「今度は、私は主をほめたたえます」と言った。それゆえ、彼女はその子をユダと名づけた。その後、彼女は子を産まなくなった。

ユダは、「ほめたたえる(ヤダ)」から来ているものです。ここで、ついに、レアは主をほめたたえています。

ここで、とても興味深いことがあります。レアは、32 節、シメオンを産んだ時から、「主(ヤハウェ)」の名を呼んでいることです。偶像の神々にも使うエロヒムではなく、主なる神の名を呼んでいます。ここに、彼女が、まことの神に、もっと関わりのある方として知っていることが分かります。四人の

子が産まれるのが、まるで、主への祈りであるかのようです。主が悩みをご覧になった。主が、聞いてくださった。次に、夫にこれで結びつくだろうといて、最後が、主をほめたたえます、と言っています。祈りから、賛美へと移されています。

そして、私たちは、このユダからダビデが出てきて、ダビデの子がメシアになることを知っています。イエスは、ダビデの子です。そして、レアは、アブラハムが購入した墓に葬られることになります。ラケルは、別の墓であるのに対して、レアは、サラ、アブラハム、イサク、ヤコブと共に、葬られているのです。ここにも、見捨てられているような女であるのに、主の憐れみと恵みの目が注がれているのが分かりますね。

3A 主の祝福 30

1B 息子たちの出産 1-24

1C ラケルの反発 1-8

¹ ラケルは自分がヤコブに子を産んでいないのを見た。ラケルは姉に嫉妬し、ヤコブに言った。「私に子どもを下さい。でなければ、私は死にます。」² ヤコブはラケルに怒りを燃やして言った。「私が神に代われるというのか。胎の実をおまえに宿らせないのは神なのだ。」

実に生々しい、夫婦の会話です。ラケルは、死にますとまで強い表現を使っています。もちろん、そういった感情になっているのです。それに対してヤコブは、神が宿らせていないのだと、正論を言います。女が、必要が満たされていないのを訴えているのに、正論で返して、結局、必要は満たしていないのです。

³ 彼女は言った。「ここに、私の女奴隷のビルハがいます。彼女のところに入り、彼女が私の膝に子を産むようにしてください。そうすれば、彼女によって私も子を得られるでしょう。」⁴ ラケルは彼に女奴隷ビルハを妻として与えたので、ヤコブは彼女のところに入った。

かつて、サラが行ったことをラケルが要求しました。女奴隷によって、自分の子を得ようとしていることです。サラの場合は、神の約束がかなえられていないので、それで不必要な責任を感じて、自分で果たさなければいけないと思ったのですが、ラケルは、単に嫉妬心でそう言っています。ここに、信仰の姿が見えません。

⁵ ビルハは身ごもり、ヤコブに男の子を産んだ。⁶ そこでラケルは、「神は私をかばってください、私の声を聞き入れて、私に男の子を与えてくださった」と言った。それゆえ、彼女はその子をダンと名づけた。

「かばう」とは、正しくさばくとも訳すことができ、ダンは「さばく(ディン)」からの名前です。レアが、

主の御名、ヤハウエを呼んでいるのに対して、ラケルは、エロヒム、一般の神の名を使っています。

⁷ ラケルの女奴隷ビルハは再び身ごもって、ヤコブに二番目の男の子を産んだ。⁸ そこでラケルは、「私は姉と死に物狂いの争いをして、ついに勝った」と言って、その子をナフタリと名づけた。

ナフタリは、「争う(パタル)」から来た言葉です。ここでは、神の名が全く使われていない、ただ姉レアへの嫉妬心だけが剥き出しになっています。ラケルが、どれだけ霊的な人だったのか、分からないことがあります。後に、ラケルは、父ラバンの偶像ティラフィムを盗んだことがあります。彼女は、それほど主ご自身に対して真剣ではなかったのか？と見えます。

2C 女奴隷による競争 9-13

しかし、レアも、剥き出しの競争に突入します。彼女も女奴隷を使うのです。

⁹ レアは自分が子を産まなくなったのを見て、彼女の女奴隷ジルパをヤコブに妻として与えた。¹⁰ レアの女奴隷ジルパはヤコブに男の子を産んだ。¹¹ レアは「幸運が来た」と言って、その子をガドと名づけた。

ガドは、「幸運」という意味です。

¹² レアの女奴隷ジルパはヤコブに二番目の男の子を産んだ。¹³ レアは、「なんと幸せなことでしょう。女たちは私を幸せ者と言うでしょう」と言って、その子をアシェルと名づけた。

「幸せと思う(アシャル)」という言葉から来ています。

ところで、旧約聖書には、一夫多妻制が出てきます。しかし、どれ一つとして、それが理想の姿を示していません。主が初めになされたのは、一人の男に対して一人の女です。これが、主のみこころです。しかし、一夫多妻制を許容しておられました。

あるアメリカ人の牧師が、興味深いことを言っていました。今でこそ一夫多妻制は法で禁じられていますが、しかし次々と離婚しては再婚するのは、実質、一夫多妻制と変わらないことをしているということです。

思えば、ユダヤ人たちがイエス様に詰問した時に、モーセが離婚状を出すように命じているけれども？と言った時に、「あなたがたの心が頑なだからだ。神は男と女を結び合わせて、一体になった。」と言われて、とっかえひっかえ、結婚相手を変えることは姦淫の罪であることを教えられました。当時は、見合い結婚だったので、気に入らなければ他の女に変えるというような思いが、ユ

ダヤ人たちの間にもあったのです。マラキも、異邦人を妻にしている祭司たちのことを咎めて、主が「わたしは離婚を憎む」と言われているのを、預言しました。

3C 取り引き 14-21

こうやって、互いに女奴隷によって争っていましたが、次に、一つの取り引きを二人がします。

¹⁴ さて、麦の刈り入れのころ、ルベンは出て行って、野で恋なすびを見つけた。そして、それを母レアのところに持って来た。すると、ラケルはレアに「どうか、あなたの息子の恋なすびを少し私に下さい」と言った。¹⁵ レアはラケルに言った。「あなたは私の夫を取っても、まだ足りないのですか。私の息子の恋なすびまで取り上げようとするのですか。」ラケルは答えた。「では、あなたの息子の恋なすびと引き替えに、今夜、あの人にあなたと一緒に寝てもらいます。」

「恋なすび」ですが、おそらく妊娠誘発剤のようにみなしていたのでしょう。ラケルとは、ヤコブは寝ていましたが、子が生まれませんでした。レアは、寝てもくれません。そんな中で、ルベンの恋なすびをくれと言います。その代わりに、レアに、夫ヤコブと寝てもらえばよいとします。こうやって、ライバル同士が、交換条件を付けて約束するのです。

¹⁶ 夕方になって、ヤコブは野から帰って来た。レアは彼を出迎えて言った。「あなたは私のところに来ることになっています。私は、息子の恋なすびで、あなたをようやく手に入れたのですから。」その夜、ヤコブはレアと寝た。

ここに、ヤコブが精いっぱい、働いている様子がうかがえます。当然、身体が疲れています。しかし、レアは、恋なすびを売って、あなたを手に入れたのだと要求してくるものですから、彼は仕方がなく、寝ます。それで、さらに子が生まれます。

¹⁷ 神はレアの願いを聞かれたので、彼女は身ごもって、ヤコブに五番目の男の子を産んだ。¹⁸ そこでレアは、「私が女奴隷を夫に与えたので、神は私に報酬を下さった」と言って、その子をイッサカルと名づけた。

レアは神に願ったようです。それで祈りが聞かれています。イッサカルは、「報酬を与える(サカル)」から来ています。

¹⁹ レアはまた身ごもって、ヤコブに六番目の男の子を産んだ。²⁰ レアは言った。「神は私に良い賜物を下さった。今度こそ夫は私を尊ぶでしょう。彼に六人の子を産んだのですから。」そしてその子をゼブルンと名づけた。

「ともに住むでしょう」がザバルと言います。それから、ゼブルンという名になっています。

²¹ その後、レアは女の子を産み、その子をディナと名づけた。

他にも女の子を産んだ可能性がありますが、女の子の名が出てくるということは、これからの話で関連があるからです。そう、後にディナは、シェケムの町で凌辱されます。同じレアから生まれた兄、シメオンとレビが怒ります。

4C ラケルへの願ひ 22-24

²² 神はラケルに心を留められた。神は彼女の願ひを聞き入れて、その胎を開かれた。²³ 彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言った。²⁴ 彼女は、その子をヨセフと名づけ、「主が男の子をもう一人、私に加えてくださるよう」と言った。

レアに心を主が留められてから、長いこと経ちました。おそらく七年ぐらい経っています。ついに、主がラケルにも子を与えられました。そしてラケルが、ヤハウエ、主の御名を呼んでいます。神とのかかわりができたことが伺えます。

ヨセフは、「加える(ヤサフ)」から来ている名前です。男の子が加えられますようにという願いです。ベニヤミンが後に生まれますが、それが難産で、悲しいことに彼女は死んでしまいます。

2B 家畜 25-43

1C 奴隷のような労働 25-30

²⁵ ラケルがヨセフを産んだころ、ヤコブはラバンに言った。「私を去らせて、故郷の地へ帰らせてください。²⁶ 妻たちや子どもたちを私に下さい。彼女たちのために私はあなたに仕えてきました。行かせてください。あなたに仕えた私の働きは、あなたがよくご存じなのですから。」

ラケルに子が生まれたので、ヤコブにも決心ができたのでしょう。すでに七年が経っています。その間、彼は、奴隷のように使役されていました。「妻たちや子どもたちを私に下さい」と言っています。まるで、妻が自分のものでないかのように、子どもが自分のものでないかのように、働かされてきました。

同時に、ヤコブの働きがあまりにも実りがあります。ラバンも次の節で認めています。31 章で、ヤコブがラバンに訴えている言葉がありますが、そこでどれだけ、ヤコブが誠実に、苦勞して働いてきたか、その証しを聞くことができます。ヤコブには、自分の力で機会を得ようとする欠点がありましたが、しかし、主にあって誠実に仕えていくことにおいては、特筆に値します。

思えば、アブラハムの生涯から私たちは、信仰について学びました。目に見えぬ約束をいかに信じて、それで義と認められるかについてです。イサクからは、約束のうちに留まることについて学びました。相続の子として、約束の地から出ることはなく、また井戸が埋められても、それでもあきらめずに掘っていった姿から伺うことができました。

ヤコブは何でしょうか？主にあって、誠実に仕えていくことです。主の恵みを受けた者が、しもべの姿を取って、労苦しながら仕えていく姿です。主が命じられたように、弟子たちは互いに仕えることに召されています。そして、何度となく主は、タラントの喩えであるとか、いろいろな喩えで、人々のしもべになるように、仕えるように教えられました。ご自身が仕える姿を取られ、十字架に至るまで従順でした。それが無駄にならず、復活によって報われたのです。私たちも同じです。復活すれば、主が各人に報いを与えてくださいます。

²⁷ ラバンは彼に言った。「私の願いをあなたがかなえてくれるなら——。あなたのおかげで主が私を祝福してくださったことを、私は占いで知っている。」

ラバンは、占いもしていました。ティラフィムという偶像も持っていたことが後で分かりますが、ハランは偶像の神々を拝んでおり、アブラハムの父テラは、偶像礼拝者でした。しかし、アブラハムに対する啓示によって、ヤハウェの神、主も知っていたのです。

けれども、主を知りながらも偶像礼拝をしているラバンにも、ヤコブの神、主がおられることが証しされていたのです。かつて、ペリシテのアビメレクが、アブラハムに主がともにおられること、またイサクにも主がともにおられると認めざるを得なかったように、ラバンも、主がヤコブと共にいて、祝福しておられることを認めざるを得なかったのです。

²⁸ さらに言った。「あなたの報酬をはっきりと申し出てくれ。私はそれを払おう。」²⁹ ヤコブは彼に言った。「私がどのようにあなたに仕え、また、あなたの家畜が私のもつでどのようであったかは、あなた自身がよくご存じです。」³⁰ 私が来る前は、あなたの財産はわずかでしたが、増えて多くなりました。私の行く先々で主があなたを祝福されたからです。いったい、いつになったら私は自分の家を持てるのですか。」

ラバンは、報酬を「払おう」と言っていますが、払うつもりはないのです。それで、ヤコブが、そのことばに信用せず、「いつになったら私は自分の家を持てるのですか」と訴えているのです。それでヤコブは次に、これだったらラバンが呑むであろうと思う、とても不利な条件を自らに課します。

2C 不利な報酬 31－36

³¹ 彼は言った。「あなたに何をあげようか。」ヤコブは言った。「何も下さるには及びません。もし私

に次のことをしてくださるなら、私は再びあなたの群れを飼って守りましょう。³² 私は今日、あなたの群れをみな見て回りましょう。その中から、ぶち毛と斑毛の羊をすべて、子羊の中では黒毛のものをすべて、やぎの中では斑毛とぶち毛のものを取り分けて、それらを私の報酬にしてください。³³ 後であなたが私の報酬を見に来られたとき、私の正しさが証明されるでしょう。やぎの中に、ぶち毛や斑毛でないものや、子羊の中に、黒毛でないものがあれば、それはすべて、私が盗んだことになります。」

これは、非常に不利な条件です。やぎで、斑毛とぶち毛のもの、子羊では黒毛のものは、数とすれば非常に少ない割合です。ラバンの群れの中でも、わずかしかないでしょう。ラバンにとっては、「規格外の商品だけをおねだりしているのだな」という感じです。

³⁴ するとラバンは言った。「よろしい。あなたの言うとおりになればよいが。」³⁵ ラバンはその日、縞毛と斑毛の雄やぎと、ぶち毛と斑毛の雌やぎのすべて、すなわち身に白いところのあるもののすべて、それに、黒毛の子羊のすべてを取りのけて、息子たちの手に渡した。³⁶ そして、自分とヤコブの間に三日分の距離をおいた。ヤコブはラバンの残りの群れを飼った。

ラバンは、ここで姑息な手段を使っています。ヤコブには、縞毛、斑毛、ぶち毛のやぎ、また黒毛の羊は、与えません。自分の息子に与えているのです。つまり、そうではない羊から、これらの羊が生まれるということは、さらに確率が低くなりますから、ヤコブはずっと、ラバンの羊ややぎを飼うことになります。

3C 主による逆転 37-43

しかし、ここでラバンの姑息な手段に対して、主ご自身が介入して、逆転させるのです。

³⁷ ヤコブは、ポプラや、アーモンドや、すずかけの木の若枝を取り、それらの白い筋の皮を剥いで、若枝の白いところをむき出しにし、³⁸ 皮を剥いだ枝を、群れが水を飲みに来る水溜めの水ぶねの中に、群れと差し向かいに置いた。それで群れのやぎたちは、水を飲みに来たとき、さかりがついた。³⁹ こうして羊ややぎは枝の前で交尾し、縞毛、ぶち毛、斑毛のものを産んだ。

ここで、掛詞があります。この「白いところ」のヘブル語の発音がラバンなのです。ラバンが、剥き出しにされた、ということです。主が、ラバンの悪事をむき出しにされて、無きものにされているということです。

この剥き出しになった、若枝の白いところですが、これによってやぎや羊が発情して、交尾するということですが、科学的ではありません。まじないのようにしか、見えません。しかし、その過程に、主が介在されています。「31:10-13 群れのやぎにさかりがついたとき、私が夢の中で目を上げて

見ると、見よ、雌やぎと交尾している雄やぎは、縞毛、ぶち毛、斑毛ばかりであった。¹¹すると、神の使いが夢の中で私に『ヤコブよ』と言われた。私は『はい』と答えた。¹²御使いは言われた。『目を上げて見よ。雌やぎと交尾している雄やぎはみな、縞毛、ぶち毛、斑毛である。ラバンがあなたにしてきたことはみな、わたしが見た。^{13a} わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。・・』」このように、主が介在されています。

思えば、主イエスご自身の癒しでも、迷信めいた行為がありますね。例えば、土につばきをかけて泥にして、目に塗りました。それを、シロアムの池で洗いなさいと言われました。こうした行為が、まじないのようにして治すのでしょうか？いいえ、主が介在されて、信仰が働くための一つの具体的に行為なのです。どのような形かは、いろいろありますが、そこに主がおられると信じるのです。そうやって、信仰が目に見える形で働き、それで神が癒してくださいます。

⁴⁰ ヤコブは羊を分けて、その群れが、ラバンの群れの縞毛のものとすべての黒毛のものに、向かい合わせになるようにした。彼は自分の群れを別にまとめておき、ラバンの群れと一緒にしなかった。

縞毛、黒毛のものが自分の群れになります。それ以外のは分けておきました。

⁴¹ また、強い群れにさかりがついたときに、ヤコブはいつも、あの枝を水ぶねの中に、群れの目の前になるように置き、枝のところで交尾させた。⁴² しかし、弱い群れのときには、それを置かなかった。こうして、弱いものはラバンのものとなり、強いものはヤコブのものとなった。

強いのに、この若枝の白いのを出して、交尾させました。それが、縞毛や斑毛、黒毛のものを生み出していきます。

⁴³ このようにして、この人は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになった。

ここにおられる主は、羊ややぎの群れをこのように増やしたので、それで男女の奴隷も増やして、労働力を引き上げます。また、運搬のための、らくだやろばも増やしました。こうやって、ラバンはすべてを自分のものにしていたつもりが、主がヤコブの働きを逆転させて、ヤコブが豊かになるようにしてくださったのです。

これが 31 章では 6 年続いたとありますので、合計 20 年です。すごい月日でした。けれども、十一人の息子が与えられ、家畜が増え、豊かにされました。主が、労苦を無駄にされないのです。いろいろあっても、主のみこころだけが実現します。